CAS
News Letter
Center for Asian Studies, Kanagawa University
神奈川大学アジア研究センター
No.20 December, 2023

Contents

「アジアの日常：開設10周年を迎えて」 山家 京子 …… 1
《個別奨励研究報告》
「新型コロナウイルスがアジアの国際物流に与える影響と対応策に関する考察」 魏 鍾振 …… 3
《研究会／調査報告》
「水俣病支援者コミュニティに関する公開研究会と現地調査」 高城 玲 …… 6
《調査報告》
「儚さをたたえて在ること──「宮永愛子 ──海をよむ」をめぐって」 松本 和也 …… 8
2023年度活動報告（2023年4月～2023年10月） …… 10

アジアの日常：開設10周年を迎えて

所長 神奈川大学建築学部教授 山家 京子

アジア研究センターは、調査研究と学術交流を通してアジアの平和と発展に寄与することを目的に2013年4月に開設され、今年10周年を迎えた。今秋、開設10周年を記念して、シンポジウム「アジアの日常」を開催することとなった。

1 主題「アジアの日常」

2019年末に始まったコロナパンデミックは、全世界で私たちの日常を揺るがすものとなった。コロナ以前、私たちは朝起きて、満員電車でオフィスに向かい、同僚と机を並べて仕事をし、週末には友人たちと食事を楽しむといった日常を過ごしていた。ところがコロナ禍にあって、ステイホームが叫ばれ、密は避けなければならず、人との会話も画面越しとなった。あたり前だと思っていた日常が消えた日々であったと同時に、今ここにある日常に向き合う時間でもあった。

コロナパンデミックは一種の災害である。これまでも、戦争と災害は日常を断つものとして存在してきた。この10年を振り返ったとき、日本では地震や豪雨をはじめ大きな自然災害に見舞われ、被災地では日常が絶たれた。

そして、ウクライナでは今もなおロシア侵攻により日常を奪われている。

私たちの日常、アジアの日常のルーツはどこにあるのか、日常は何によって構成され、どのように私たちの前に現れるのか。また、何が日常を支え、あるいは脅かすものは何か。このように「日常」は「アジア」を問い直す一つの視点になり得ると考える。

2 「アジア都市の生活圏」からみた「アジアの日常」

「アジアの日常」について、共同研究グループ（代表：山家）の主題「アジア都市の生活圏」から考えてみたい。

「生活圏」は自宅から徒歩で移動できる範囲を指し、およそ小学校区くらいの広さである。近年、その生活圏を見直し充実させる動きが広がっている。都市計画コンセプト「15-min City」や「20-min Neighborhood」に示されるとおり、自家用車の移動削減による脱炭素社会の実現を背景として、生活が自宅を中心とした徒歩圏で完結することを目指している。これらの考え方は以前からあったのだ

が、コロナパンデミックにより、否が応でも自宅周辺の環境に関心が向けられるようになり、注目が高まったといえる。そこでは、利便性だけでない、居心地の良さも生活圏に求められる。例えば「20-min Neighborhood」が求める要素の一つに「Ability to age in place」がある。その地で年齢を重ねられること、老いを迎えられることを意味する。機能的に病院や健康増進・福祉施設があればよいわけでなく、おしゃべりを楽しむコミュニティがあり、心を豊かにしてくれる自然環境に恵まれている―そうした「生活圏」が求められているのである。

このような「生活圏」再編の動きは欧米の都市を中心に、職住一致、少なくとも住居と職場を近づける方向性を有している。例えば、アジアでも韓国・ソウル市では地下鉄駅を中心に生活圏を基盤とする空間単位を設定しようとする計画がある。これらは住居と職場が公共交通機関や自動車の移動によりある距離をもって隔てられる現状を前提としている。一方、アジアの諸都市ではバイク・自転車の移動が多くみられ、それが日常の風景を作り上げている。これらは二つの離れた圏域を朝夕に移動するのではなく、生活圏に住居と職場が併存するのでもない。中間的なスケールで日常が営まれており、それがアジア都市固有の景観を形成しているといえる。

「アジア都市の生活圏」を「日常」から考えるとき、まず、「日常」の基盤となる生活圏を観察し描写することで「アジア」の特質が見えてくるだろう。生活圏が何から構成され、過去から継承しているものは何か、文化的特質は何か。例えば、モビリティにより生活圏のスケールが異なることもアジアの特質と考えられるだろう。一方、私たちは、豊かな「日常」を支える生活圏を構築するアジア的計画論・制度を考えなければならない。それは、専ら欧米で先行して実践されたものとは手法的にも異なるはずである。

3 「アジアの日常」へのアプローチ

10周年シンポジウムでは、Lam Peng Er博士による基調講演とともに、各分野を代表する研究者のショートスピーチにより、「アジアの日常」に関する学際的かつ幅広い議論が展開されるものと期待している。また、アジア研究センターが研究活動の基盤とする個々の「共同研究」においても「アジアの日常」へのアプローチを試みる。それらは連続研究会として発信される予定である。

第1回連続研究会として、共同研究「アジアにおけるコミュニティ再考」(代表:高城玲)公開研究会「支援者コミュニティの社会経済学――水俣病センター相思社の50年」(発表者:平井京之介氏)が開催された。研究会の主たる関心はタイトルの示す通りだが、「アジアの日常」の視点からも読み解こうとする試みである。コミュニティというテーマそのものが「日常」を包含しており、講演を聞くまでは、単純に「水俣病被害者の日常を支える組織、支援者コミュニティのあり方」として読み解くことを考えていた。しかし、そこで語られた内容は、むしろ、被害者ではなく支援者コミュニティの日常、つまり活動の日常的実践を論じるものであった。「日常」はまず「生活」を想起させるが、「社会」からのアプローチの可能性を示す大変興味深い研究会となった。

10周年にあたる2023年、1年を通して多角的なアプローチから「日常」を考え、「アジア」について問い直す機会としたい。

「アジアの日常」シンポジウムポスター